

英語習得における日本語能力の影響

－中学生を対象とした待遇表現調査から－

田村 京子・早野 慎吾

**The Influence of Japanese Ability on Learning English
- A Survey of the Use of Honorific Expressions by Junior High School Students -**

Kyoko TAMURA · Shingo HAYANO

Summary

This research was conducted on 30 ninth grade students in the Miyazaki University Affiliated Junior High School from October to November, 2008. This study used the research of the National Japanese Institute on honorific knowledge on honorific expressions in Japanese. Knowledge of honorifics is one of the factors used in assessing the scholastic ability of Japanese and is also highly correlated with scholastic ability of Japanese (Hayano 1996). In the course of study, students learn about 900 English words over three years. Research on making suitable sentences with honorifics in English was carried out. Three situations were given to students. Then, research on personality traits with about 20 items based on Hayano (1996) was carried out.

The results indicated that there was no correlation between honorific knowledge in Japanese and the ability to make sentences in English. Junior high school students as speakers didn't know various honorific expressions in English. There were gaps between their Japanese knowledge and their English knowledge regarding honorific expressions. If they mastered the use of English, we would expect to find correlation with honorific knowledge in future research.

1. はじめに

現在、学校教育における外国語教育に大きな変動が起きている*1。このような状況の中で、母語である日本語と外国語学習がどのように関係しているかを外国語教育に携わる者は熟知しておく必要がある。今回は、特に待遇表現を対象に日本語と英語習得の関係を扱う。待遇表現は、その複雑さゆえに獲得には言語能力が大きく関係すると思われる言語要素である(早野1996)。本稿では、特にプラスの待遇表現である敬語について扱う。

本研究では、中学3年生を対象に、日本語の敬語知識が英語の待遇表現にどのような影響を与えているかを考察する。国語の学力と敬語知識の関係を論じた研究には早野(1993, 1996)がある。早野(1993, 1996)では、敬語知識には話者のパーソナリティ(特に志向性)が大きく関係していることが報告されている。今回は、英語の待遇表現習得には話者のどのようなパーソナリティが関係しているのかも分析する。

第二言語習得(acquisition)と第二言語学習(learning)とは異なるプロセスであるという前提に基づいて、これら2つのプロセスがしばしば区別されてきた経緯がある。今回の対象者の場合は、「第二言語学習」との表現が適しているかもしれないが、本稿では「習得」の概念は「学習」を含むという立場から(R.Ellis 1988)、「習得」を用いることとする。

2. 調査概要

調査は、平成20年10月から11月にかけて、宮崎大学教育文化学部附属中学の3年生30名に対して行った。現学習指導要領において中学生が3年間で習得する語は900語程度と明記されている。そのため、学習した英語での待遇表現は限られたものとなっているが、場面を設定し、それに適する英作文を作成するという方法を用いた。

2.1. 日本語調査項目(敬語知識)

敬語知識は国語力の一要素であり、国語の学力との相関関係も高い(早野 1993, 1996)。今回は敬語知識調査として国立国語研究所編(1957)の6項目に早野(1996)の2項目を追加して行った。回答方法は、以下の文において、敬語の箇所にアンダーラインを引くというものである。調査票にアンダーラインはない。数量化に関しては、1問正解するごとに2点(部分正解は1点)ずつ加算した。全体が8問のため最高点は16点である。これを敬語知識得点と表現する。

- 1) あの人は駅へ行かれた。
- 2) 一つお待ち下さい。
- 3) 今日はお野菜がやすい。
- 4) ここにあります。
- 5) これはいただいたものだ。
- 6) 知事のお車はもう駅を出発した。
- 7) あしたは山田さんが来る。
- 8) 『吾輩は猫である』という本を読んでいらっしゃる。

2.2. 英語調査項目(待遇表現)

話者の英語表現力のための英作文作成調査を行った。調査文は次の3項目である。

設問1 窓を開けることをお願いする表現をできるだけたくさん書いてください。

設問2 宿題を教えてほしいと思っています。次の人達にお願いする時は、どのように表現するか、それぞれ考えて書いてください。

設問3 テレビを見ている時に、お母さんに「勉強しなさい」と言われました。お母さんに引き続きテレビを見ることをお願いする表現を書いてください。

設問1では、より丁寧な表現になるように書くように回答を求めた。得点化は以下の表現に点数を与える形にし、Pleaseはポイントに含まないこととした。

- 1点 Open the window.
- 2点 Can you open the window?
- 3点 Will you open the window?
- 4点 Could / Would you open the window?
- 5点 Can I ask you to open the window?

設問2は、友達/担任の先生/校長先生にお願いする3パターンで考えさせた。丁寧度を考えて回答しているかどうかを基準に、1つ適合している場合が1点。2つ適合している場合が3点。3つとも適合している場合が5点とした。回答例は以下の通りである。

- 3点
 - 1) Will you teach my homework?
 - 2) Would you teach my homework?
 - 3) Would you please teach my homework?
- 5点
 - 1) Can you help me with my homework?
 - 2) Will you help me with my homework?
 - 3) Could you help me with my homework?
 - 4) Would you please help me with my homework?

設問3では、複数のパターンを考えるように指示をした。得点化には、より良いコミュニケーションの姿勢を含めた部分をポイントに入れ、次のようにした。「見たい」だけを記載している場合は1点。依頼表現の場合は2点。理由をつけて主張している場合は3点。後で勉強することを伝えている場合は4点。理由を述べた上で、後で勉強することを伝えている場合は5点とした。回答例は以下の通りである。

- 1点 I want to watch TV now.
- 2点 May I watch TV more? I want to watch TV.
- 5点 I want to watch this TV program. I'll study after it is over.
Can I keep watching?

英作文の評価は、影浦（1996）の評価規準を参考にした。影浦（1996）では、英作文の評価について次のように記述されている。

英語の評価は、正確さを重視した評価から、話者の英語へのかかわりを促進するような視点から行う必要がある。そのためには、

正確さ (accuracy) の重視から意思伝達性 (communicability) の重視への転換
減点主義から加点主義への転換

単一の基準から複数の基準への転換

評価基準のポイントは、内容を重視すべきであり「語句・文法・構文が正しい」を図る表現方法については、得点全体の20パーセントと設定している。上記の基準により得点化したものを英作文得点とする。

2.3. パーソナリティ項目

パーソナリティ調査は早野(1996)での13項目を基本として、中学生の英語習得に有効と思われる7項目を新たに追加し、次の20項目を用いた。14-20までが今回、新たに加えたものである。各項目に話者の性格が「あてはまっている」か「あてはまらない」かを話者自身に判断してもらった。2, 10, 14のアイテムに関しては、「あてはまる」とした回答が2名以下だったため今回は分析から外している。

1. 正しいと思うことは他人に構わず実行する。
2. 規則は守るべきである。
3. 正しい言葉遣いをするように心がけている。
4. 都会に憧れている。
5. 東京語が好きである。
6. 大学に進学するなら東京の大学がいい。
7. 流行に敏感である。
8. おしゃれである。
9. 流行語をよく使う。
10. 地元が好きである。
11. 人だらけの都会よりも、自然が豊富な地元がいい。
12. 方言が好きである。
13. 悪いことば、乱暴なことばを使うことがある。
14. 人と話すことが好きである。
15. 勉強が好きである。
16. 何事にも積極的に取り組む方である。
17. 自己アピールが得意な方である。
18. 友達が多い方である。
19. 外国人の友達を作りたい。
20. 将来、外国に住んでみたい。

3. 日本語待遇知識と英語待遇表現の関係

2.1.の敬語知識の点と2.2.の英作文の点から相関関係を求めると、敬語知識と英作文1との積率相関係数は.05, 英作文2とは-.01, 英作文3とは.01であり英作文1, 2, 3ともに相関関係は認められない。ここから判断すると、日本語の敬語知識が英語待遇表現には関係していないことになる。

第二言語習得における母語の影響は、「言語転移」と呼ばれる。奥野(2005)では、オドリン(1995)の定義を基に、「言語転移とは、母語やそれ以外にこれまで学習した言語と、目標言語の類似点及び相違点から、学習者の意識的・無意識的な判断により、目標言語の運用上や、習

得の過程上に現れる影響のことである」(p. 27-28)と定義している。第二言語習得における母語の影響(言語転移)は、今回の調査からは認められなかった。調査対象である中学3年生は、日本語においては使う場面に適した敬語を使い分けができるレベルであり、それらの表現が適当であるかどうかは別として、待遇表現を相手や場面に合わせて意識して使うことができる。一方で、英語は、相手や場面に合わせて使い分けをできる運用レベルには到達していない。中学校で習得するレベルは、現行の学習指導要領において「『語、連語及び慣用表現』については、指導する語の総数を900語程度とし、その中に含めるべき語として基本的な100語を示した」(中学校学習指導要領解説 - 外国語編 -)と明記されている。英語を流暢に運用するレベルを英検1級と仮定した場合、英検1級で必要とされる語は約10,000~15,000語と言われ(日本英語検定協会)、中学生レベルの英語がいかに初歩の初歩であるかがわかる。ちなみに、中学生修了程度である3級で必要とされる語彙数は、2100語である。文部科学省編『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』(2003)では、国民全体に求められる英語力の目標として、英検のレベルを例として提示している。待遇表現として日本語で表現できる文はさまざまであるが、中学生が習得した英語表現の数は少ない。言語間の類似点や相違点から影響を受けるのではなく、パターンとして習得した表現を駆使するレベルのため、言語転移を見ることはできなかったと考えられる。おそらく語彙に関する項目では、初期段階から言語転移は観察できるものと思われるが、待遇表現に関しては、より上級レベルに達した段階で観察できるものと思われる。

4. パーソナリティと英語表現の関係

	I 軸	II 軸
相関係数	.417	.379
固有値	.174	.144

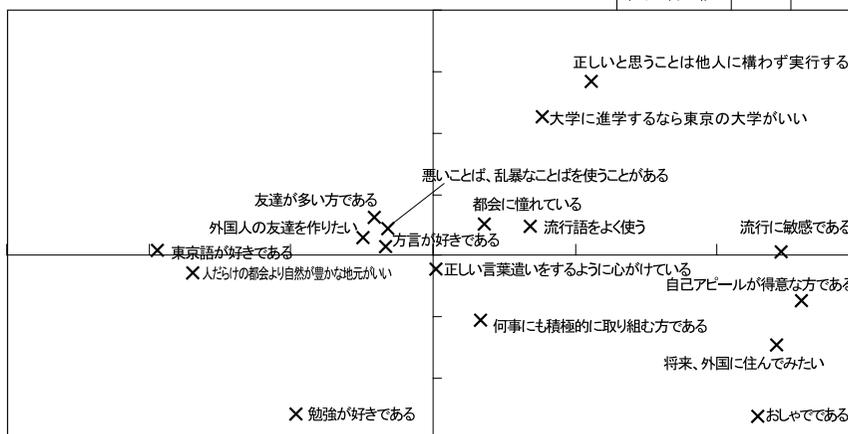


図1 パーソナリティ項目の散布図

パーソナリティ項目を林の数量化理論第 類で分析すると図 1 のようになる。林の数量化理論第 類とは反応の似たサンプルやカテゴリーの分類をしたり、特性を調べたりする手法であり、反応パターンの似ているものが近くに集まる。

図 1 はアイテムの配列から、第 1 軸はマイナス方向に「勉強が好きである」「東京語が好きである」といった社会的規範性の強いアイテムがきており、プラス方向には「おしゃれである」「流行に敏感である」等の流行性(反規範性)の強いアイテムが来ている。つまり、規範 - 流行(反規範)の軸と解釈できる。第 2 軸はプラス方向に「都会に憧れている」「大学に進学するなら東京の大学がいい」、マイナス方向に「何事にも積極的に取り組む方である」「おしゃれである」等のアイテムが来ている。マイナス方向ほど積極性の強いアイテムが来て、プラス方向ほど積極性の弱い(消極的な)アイテムが位置していると解釈できる。つまり積極性 - 消極性の軸と解釈できる。「正しいことばを使うように心がけている」のアイテムが中央に位置しており、調査校の話者は基本的に規範性が強いことがわかる。

敬語知識得点、英作文得点を目的変量、パーソナリティ項目をアイテムとして林の数量化理論第 類で分析すると表 2 になる。多重共線性の関係から、有効であった 9 項目に限定して分析した結果である。カテゴリー数量の上段が「あてはまる」の回答、下段が「あてはまらない」の回答に関するものである。

4.1. 敬語知識とパーソナリティ

表 2 の結果より、敬語知識にもっとも有効なアイテムは「流行語をよく使う」(偏相関係数.538)である。「あてはまる」のカテゴリー数量がマイナスなので、流行語をよく使う話者ほど得点が低いことがわかる。次に有効なアイテムが「東京語が好きである」(偏相関係数.496)である。「あてはまる」のカテゴリー数量がマイナスなので、東京語が好きな話者ほど得点が低いことが分かる。「東京語が好きである」は、最も規範性の強いアイテムであるが、敬語知識とのプラスの相関が見られない。しかし、「東京語が好きである」とほぼ同じ相関を示しているアイテムが、「人だらけの都会よりも、自然が豊富な地元がいい」(偏相関係数.494)である。これは、「東京語が好きである」の次に規範性の強いアイテムである。敬語知識には、やはり規範性が関係していると考えられる。

4.2. 英作文 1 とパーソナリティ

表 2 の結果より、英作文 1 にもっとも有効なアイテムは「東京語が好きである」(偏相関係数.575)である。「あてはまる」のカテゴリー数量がプラスなので、東京語が好きな話者ほど得点が高いことがわかる。図 1 で示したように、このアイテムは最も規範性が強いと解釈できる。次に有効なアイテムが「流行に敏感である」(偏相関係数.490)である。「あてはまる」のカテゴリー数量がマイナスなので、流行に敏感な話者ほど得点が低いことを意味している。このアイテムは流行性(反規範性)が強いと解釈できるものである。つまり規範性が得点に大きく関係していることがわかる。ただし、規範性の強いアイテムでも、積極性の強い「勉強が好きである」は、「あてはまる」の値がマイナスであり、また「おしゃれである」の相関が低いところから積極性がマイナスに働いていることがわかる。

	敬語知識			英作文 1			英作文 2			英作文 3		
	カテゴリ- 数量	レンジ	偏相 関係数									
(n = 30)												
正しい言葉遣いをす るように心がけている。	0.636 -1.748	2.383	0.347	-0.089 0.189	0.278	0.183	-0.119 0.254	0.373	0.180	0.020 -0.042	0.062	0.025
都会に憧れている	-0.482 0.833	1.315	0.199	-0.012 0.015	0.026	0.019	0.081 -0.103	0.183	0.095	0.660 -0.840	1.500	0.537
東京語が好きである。	-2.821 0.859	3.679	0.496	0.696 -0.220	0.915	0.575	0.698 -0.220	0.919	0.459	0.651 -0.206	0.856	0.365
流行に敏感である。	-1.239 0.620	1.859	0.229	-0.502 0.335	0.837	0.490	-1.236 0.824	2.059	0.711	-1.317 0.878	2.195	0.659
おしゃやれである。	-0.489 0.149	0.637	0.075	0.284 -0.111	0.395	0.241	0.047 -0.018	0.065	0.030	-0.130 0.050	0.180	0.067
流行語をよく使う。	-1.688 1.929	3.617	0.538	-0.019 0.024	0.043	0.032	0.416 -0.530	0.946	0.462	-0.012 0.015	0.027	0.012
人だらけの都会より も、自然が豊富な地元 がいい。	1.266 -1.899	3.166	0.494	-0.015 0.023	0.038	0.034	-0.214 0.321	0.535	0.334	0.262 -0.393	0.656	0.333
方言が好きである。	-0.150 0.978	1.128	0.145	0.071 -0.375	0.446	0.303	0.184 -0.964	1.147	0.513	0.011 -0.060	0.071	0.030
勉強が好きである。	-1.547 1.353	2.900	0.355	-0.465 0.429	0.895	0.436	-0.052 0.048	0.100	0.040	0.146 -0.134	0.280	0.090
	重相関係数 = .821 寄与率 R ² = .675			重相関係数 = .823 寄与率 R ² = .677			重相関係数 = .860 寄与率 R ² = .739			重相関係数 = .860 寄与率 R ² = .740		

表 2 敬語知識・英作文 1 2 3 とバーンソナリティ

4.3. 英作文2とパーソナリティ

英作文2にもっとも有効なアイテムは「流行に敏感である」(偏相関係数.711)である。「あてはまる」のカテゴリー数量がマイナスなので、流行に敏感な話者ほど得点が低いことを意味している。このアイテムは、流行性(反規範性)が強いと解釈できるものである。次に有効なアイテムが「方言が好きである」「流行語をよく使う」である。これらは相反しているように思えるが、図1から2つのアイテムは近い関係にあることがわかる。また、話者が両方とも規範性に反するものではないと捉えていることがわかる。「東京語が好きである」(偏相関係数.459)にも高い相関が見られ、有効なアイテムであると言える。「あてはまる」のカテゴリー数量がプラスなので、東京語が好きな話者ほど得点が高いことがわかる。図1で示したように、このアイテムは最も規範性が強いと解釈できるものである。このことから、規範性が得点に大きく関係していることがわかる。また、もっとも積極性の強いアイテムである「勉強が好きである」が「あてはまる」のカテゴリー数量がプラスで偏相関係数も.43と高いことから、英作文2においては積極性がプラスに働いていることがわかる。積極性はプラスに働く場合とマイナスに働く場合がある。

4.4. 英作文3とパーソナリティ

英作文3にもっとも有効なアイテムは「流行に敏感である」(偏相関係数.659)である。「あてはまる」のカテゴリー数量がマイナスなので、流行に敏感な話者ほど得点が低いことを意味している。このアイテムは、流行性(反規範性)が強いと解釈できるものである。次に有効なアイテムが「都会に憧れている」(偏相関係数.537)である。図1から、このアイテムは中央に位置しており、また「正しいことばを使うように心がけている」と近いことから、平均的な規範性を表すアイテムと捉えることができる。また「東京語が好きである」は偏相関係数が.365であり、有効なアイテムである。「あてはまる」のカテゴリー数量がプラスなので、東京語が好きな話者ほど得点が高いことがわかる。英作文3も規範性が得点に大きく関係している。

4.5. 待遇表現とパーソナリティ

全体を通してみると、英作文に有効なアイテムは、「東京語が好きである」「流行に敏感である」の2つであった。「東京語が好きである」は、全てにおいて高い相関が見られ、「あてはまる」のカテゴリー数量がプラスなので、東京語が好きな話者ほど英作文得点が高い。東京志向(文化的中心地)における規範意識の高い話者が、英語における待遇表現を習得している傾向が高い。「流行に敏感である」は、全てにおいて高い相関が見られるが、「あてはまる」のカテゴリー数量がマイナスなので、東京志向であっても流行性に価値観を持っている話者は英語の待遇表現を習得していない。都会志向においても、既成の価値観を尊重する規範志向と、流行などの既成の価値観にとらわれない反規範志向が存在する。英語待遇表現の習得には、「都会性(中央志向)」が大きく関係しており、都会の規範性に価値観をもっている話者(規範性の強い話者)は習得しており、反対に流行性に価値観をもっている話者(反規範性の強い話者)は習得していない傾向が強い。流行を軽薄なものにとらえ、それを拒絶することで真面目に見てもらいたいという気持ちや社会の規範を身に付けようという姿勢が大きく関係していると考えられる。伝統的に価値観の高いものを求め、そのひとつが英語であると捉えていることが英語における対遇表現の習得に必要といえよう。これは、英語習得が自分達の将来に関わるもので、

ステータスを高めるために必要なものであると認識していると解釈できる。より大きなステータスに価値観を求め、向上心を持つことが英語習得には必要であることがわかる。

敬語知識と英作文との相関は認められなかったが、どちらも都会性と規範性が関係していたことから、深層的に両者は関係していると推測できる。英語と日本語を運用できるレベルに達した話者を調査した場合、第一言語(日本語)の敬語知識が英語待遇表現の使用に大きく関係してくる(つまりプラスの転移が見られる)のではないだろうか。

5. おわりに

今回の調査を通じて、高い英語習得をしている上級学校の話者を調査する必要があることがわかった。英語を身につけるために影響されているパーソナリティは「都会性」と「規範性」であり、パターン習得には「積極性」が必要であることが今回の調査からわかった。今回扱った要因以外に英語を勉強する時間数であったり、他教科の習得状況であったりと他にもいくつかの要因が考えられる。また、Krashen(1981a)が論じているように、社交性が習得に有利なパーソナリティであるとも考えられる。パーソナリティ調査は、話者の特性を理解し、学習意欲を喚起し力を伸ばしていくためにも有効な手段であると感じた。井手(1986)による欧米人の状況とどのような違いがあるのかも確かめたい事項である。学習指導要領の改訂、小学校英語活動の必修化と時代の流れは、英語習得に更に力を入れる方向である。その中でも、母語である日本語を大切にすることを日本人を育てるために、今後も母語と英語習得の関係を調査していく必要がある。

注

- 1 平成20年度の学習指導要領の改訂に伴い、平成24年度の完全移行に向けて平成21年度より段階的に教育課程を編成していくことになっている。外国語学習でも大きな改訂が試みられる。最たるものとして、標準授業時間数が現行の各学年105単位時間から140単位時間に増加される。平成元年4月に施行された学習指導要領において外国語が選択科目として位置づけられていた時には、105-140時間であったが、現行(平成14年度施行)学習指導要領で必修科目になったことにより各学年週3時間と設定された。平成14年度以前から中学校英語に携わっている教員にとっては、以前の状態に戻す感もあり、そのことに関しては賛同する教員も多いと思われる。中学校英語以上に改訂が注目されているのは、小学校段階における外国語活動である。必修として小学校5・6年生に年35単位時間ずつの「外国語活動(原則として英語を扱う)」が導入された。これは教科としての導入ではなくその下位分類である領域としての導入とされているが、困惑する小学校教員も少なくないのが現状である。
- 2 待遇表現の数量化には荻野の数量化(1983)が有効である。しかし、今回は規範的な敬語知識をどの程度獲得しているかを基準としているため、荻野の数量化は用いないこととする。

参考文献

- 井出祥子(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂
奥野由紀子(2005)『第二言語習得過程における言語転移の研究』風間書房
奥野久(2007)『日本の言語政策と英語教育』三友社出版
SLA研究会(1994)『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館

- Rod Ellis (1988) 『第2言語習得の基礎』 NEW CURRENTS INTERNATIONAL CO. LTD.
- Rod Ellis (1996) 『The Study of Second Language Acquisition』 研究社
- 文部科学省編 (2008) 『中学校 学習指導要領』 ぎょうせい
- 文部科学省編 (2005) 『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』 ぎょうせい
- 文部省編 (1998) 『中学校学習指導要領解説 - 外国語編 - 』 ぎょうせい
- 文部省編 (1998) 『高等学校学習指導要領解説 - 外国語編 - 』 ぎょうせい
- 影浦功 (1996) 『新学力観に立つ英語科の授業改善』 明治図書
- 白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学 - 第二言語習得論とは何か - 』 岩波新書
- 国立国語研究所編 (1957) 『敬語と敬語意識』 秀英出版
- 日本英語検定協会 <http://www.eiken.or.jp/exam/index.html>
- 早野慎吾 (1993) 『個人志向性と言語使用 - 敬語について - 』 『多々良鎮男先生傘寿記念論文集』
- 早野慎吾 (1996) 『首都圏の言語生態』 おうふう

[付記]

本研究は宮崎大学教育文化学部の学部附属共同研究補助金を受けて行った研究である。本研究をまとめるにあたり、尾崎秀夫氏(創価大学講師)、デボラ オチ氏(宮崎国際大学教授)からご助言を賜った。記して感謝申し上げる。

田村京子(たむらきょうこ) 創価大学大学院修士課程
早野慎吾(はやのしんご) 宮崎大学教育文化学部